

有賀 郁敏教授 略歴と業績

I. 略 歴

1957年10月	長野県に生まれる
1980年3月	早稲田大学教育学部教育学科卒業
1980年4月	筑波大学大学院体育科学研究科博士課程入学
1985年3月	筑波大学大学院体育科学研究科博士課程単位取得退学
1985年4月	お茶の水女子大学附属中学校教諭
1992年4月	立命館大学法学部助教授
1994年4月	立命館大学産業社会学部助教授
1998年10月～1999年9月	ドイツテュービンゲン大学客員研究員
2000年4月	立命館大学産業社会学部教授
2023年3月	立命館大学定年退職
2023年4月	立命館大学特別任用教授・名誉教授

(主な学内役職歴)

1993年4月～1995年3月	学生部スポーツ強化対策室副室長
1995年4月～1997年3月	学生部副部長
1997年4月～2023年3月	立命館大学体育会女子バスケットボール部長
2001年4月～2002年3月	産業社会学部企画委員長
2003年4月～2005年3月	教学部教育開発支援センター副センター長
2007年4月～2010年3月	産業社会学部副学部長
2010年4月～2011年3月	スポーツ社会専攻長
2011年4月～2013年3月	公助連代表
2011年4月～2017年3月	産業社会学部長（社会学研究科長兼任）・学校法人立命館理事・評議員
2017年4月～2019年3月	理事補佐・立命館大学副学長
2019年4月～2020年3月	理事補佐・学長特別補佐

II. 専門分野

専門分野	余暇の社会史, 近現代ドイツスポーツ史, アソシエーション論
担当科目	余暇の社会史, スポーツの歴史と発展, 入門社会学, スポーツ社会研究
学位	教育学修士（筑波大学, 1985年3月）
研究課題	ドイツの協会組織（Vereinswesen）に関する歴史社会学：19世紀ドイツの三月前期・1848/49年革命期及びドイツ国民国家形成期におけるトゥルネン協会の性格・機能分析, ドイツ社会国

家・ナチズム統治下における余暇・スポーツ政策

所属学会 日本体育・スポーツ・健康学会, ドイツ現代史研究会, 体育史学会, スポーツ史学会, 新日本
スポーツ連盟附属スポーツ科学研究所

Ⅲ. 主な研究業績

著 書

1. (共著)『スポーツの自由と現代 下巻』青木書店, 1986年(第IV章:「ファシズムとスポーツ—ドイツのファシズム化とスポーツ組織の変質—」, 435-459頁)。
2. (共著)『体育原理2—スポーツの概念』不昧堂出版, 1986年(第3章:「スポーツと疎外, 人権, 平和」, 219-224頁)。
3. (共著)『スポーツ科学と人間』文理閣出版, 1993年(「ドイツ『新時代』におけるトゥルネンの日常と非日常」, 171-185頁)。
4. (共著)『体育・スポーツ史研究の展望—国際的成果と課題—』不昧堂出版, 1996年(「ザクセン王国におけるトゥルネン協会の活動と結社の自由—ドイツ三月革命期以降のライプツィヒを中心に—」, 57-77頁)。
5. (共著)『戦後体育実践論第3巻 スポーツ教育』創文企画, 1998年(「スポーツ・フォア・オールと現代社会—『福祉国家』ドイツの状況を中心に—」, 45-56頁)。
6. (共編著)『近代ヨーロッパの探究8 スポーツ』ミネルヴァ書房, 2002年(第5章:「西南ドイツにおけるトゥルネン協会運動—1840年代のシュヴァーベンを中心に—」, 145-197頁)。
7. (共著)『現在のナショナリズム—哲学的な解説—』青木書店, 2003年(「国民社会主義統治下の余暇・スポーツ—KdFとSA」, 189-207頁)。
8. (共著)『<方法>としての人間と文化』ミネルヴァ書房, 2004年(第7章:「アソシエーションの歴史と現代の公共圏」, 132-150頁)。
9. (共著)『現代国家と市民社会—21世紀の公共性を求めて—』ミネルヴァ書房, 2005年(第11章:「初期トゥルネン協会運動における社会参加と相互扶助—トゥルナー消防団の活動を中心に—」, 258-282頁)。
10. (共著)『多様な身体への目覚め—身体訓練の歴史に学ぶ—』アイオーエム社, 2006年(「ドイツ初期協会運動の性格と役割—19世紀前半の西南ドイツを中心に—」278-301頁)。
11. (共著)『体育・スポーツの近現代—歴史からの問いかけ—』不昧堂出版, 2011年(第V章:「ドイツ初期トゥルネン協会運動における結社の自由をめぐる問題—結社, 法制度, 社会的自己調整メカニズム—」, 501-521頁)。
12. (編著)『現代スポーツ論の射程』文理閣, 2011年(序章:「歴史学とスポーツ史—歴史意識からの問い—」1-19頁, 「ドイツ初期協会組織における秩序形成—黎明期のトゥルネン協会を中心に—」180-208頁)。
13. (共著)『体育・スポーツ史にみる戦前と戦後』道和書院, 2013年(第3章:「ドイツ社会国家における余暇・スポーツ—20世紀ドイツ史の一段面—」, 169-195頁)。
14. (共著)『スポーツの世界史』一色出版, 2018年(第3章(ドイツ):「市民的結社としてのトゥルネン協会とスポーツクラブ」, 119-147頁)。

15. Aruga Ikutoshi, Reflections on Modern Japanese Society and Tokyo 2020: Authoritarian Control and Social Integration, in: Andreas Niehaus and Yabu Kōtarō (Eds.), *Challenging Olympic Narratives, Japan, the Olympic Games and Tokyo 2020/21*, Baden-Baden 2021.
16. (編著)『スポーツの近現代—その診断と批判—』ナカニシヤ出版, 2023年(第2章:「トゥルネン協会の歴史的 성격」, 25-84頁, 第15章「東京パラリンピックと新自由主義」, 357-382頁)。

論 文

1. (単著)「トゥルネン組織化運動と結社条項—主として、1850年代のザクセン王国の動向について—」『東京体育学研究』第11号, 1984年, 39-50頁。
2. (単著)「核時代のスポーツ運動—西ドイツの動向と今日の課題—」『リベルテ』5号, 1984年, 30-37頁。
3. (単著)「ドイツ体育委員会の設立と「政治的中立」問題」『東京体育学研究』第12号, 1985年, 12頁。
4. (単著)「ドイツトゥルンフェスト成立史」『たのしい体育・スポーツ』Vol. 21, 1987年, 8-13頁。
5. (単著)「冷戦体制と民主化政策の修正」学校体育研究同志会編『国民運動文化の創造』大修館書店, 1989年, 30-34頁。
6. (単著)「80年代におけるスポーツ政策の特徴と生涯スポーツ」『お茶の女子大学附属中学校紀要』第19集, 1989年, 67-92頁。
7. (単著)「「男女共修体育」の授業実践—技能学習の課題を手がかりに—」『体育科教育』1990年3月号, 40-43頁。
8. (単著)「自らチャレンジするバスケットボールの授業づくりの実際」『学校体育』1990年6月号, 23-25頁。
9. (単著)「日本型リゾート開発の構造—その特徴と再生への新機軸—」『神田外語大学体育・スポーツ論集』2号, 1991年, 9-50頁。
10. (単著)「スポーツ産業と主体形成」『運動文化研究』No.9, 1991年, 6-15頁。
11. (単著)「チームの自発的学習を促す教師の指導性—「問い」と指導の関係をみる—」『学校体育』1992年8月号, 35-37頁。
12. (単著)「ベルリントゥルネン委員会の成立と啓蒙的プロパガンダ」『立命館経済学』第43巻第3号, 1994年, 290-311頁。
13. (単著)「シュヴァーベントゥルネン同盟の活動とコーブルク祭のイニシアティブ」『立命館文学』536号, 1994年, 662-679頁。
14. (単著)「ミヒヤエル・クリューガーのトゥルネン史叙述にみる『権力論』」『立命館産業社会論集』第32巻第4号, 1997年, 267-274頁。
15. (単著)「トゥルネンと身体の規律化に関する—考察—ドイツ教養市民層の身体をめぐる知を手がかりに—」『現代スポーツ研究』第3号, 1997年, 36-42頁。
16. (単著)「近代ドイツにおける身体文化と権力をめぐる—断面—」『月刊フォーラム』1997年, 22-30頁。
17. (単著)「19世紀ドイツにおける結社研究の構想—1989/49年革命と「トゥルネン協会(Turnverein)」」『立命館産業社会論集』第34巻第2号, 1998年, 71-88頁。
18. (単著)「トゥルネン史における1848/49年革命について—革命150周年記念集会(バーデン・ヴェルテ

- ンベルク)との関連で—』『体育史研究』16号, 1999年, 49-58頁。
19. Ikutoshi Aruga, Überlegungen zum Sport in Japan, in: Annette Hofmann, Michael Krüger u.a., *Einführung in sportwissenschaftliche Disputieren, Reflektieren und Promovieren*, Tübingen 1999, S. 147-159.
 20. (単著)「19世紀前半のチュービンゲンにおけるトゥルネンとトゥルナー組織の規則」『体育・スポーツ史研究への問いかけ』清水重勇先生退官記念論集刊行会, 2001年, 61-69頁。
 21. (単著)「フリードリッヒ・ルートヴィヒ・ヤーナー・トゥルネンの『考案者』の翻訳にあたって」『立命館産業社会論集』第37巻第1号, 2001年, 147-150頁。
 22. (単著)「国民形成期ドイツにおけるトゥルネン協会史研究の課題と資料」『立命館大学人文科学研究所紀要』No.79, 2002年, 37-85頁。
 23. (単著)Sport, Öffentlichkeit und Minorität. Eine Betrachtung über die Öffentkicheit des Sports in Japan, 『立命館大学人文科学研究所紀要』No.81, 2002年, 55-75頁。
 24. (単著)「オリンピック - Olympic games」『グローバル化を読み解く88のキーワード』平凡社, 2003年, 55-57頁。
 25. (単著) Eine Betrachtung über die Öffentkicheit des Sports in Japan, Shunichi Tazuke u. a. (Hg), *Globalisierung des Sports: Zur Rolle der japanischen und deutschen Sportwissenschaft*, Kyoto 2004, S. 131-147.
 26. (単著)「ゆらぐ社会の子ども教育—階層化社会における分断から共生の社会へ—」角垣健美先生定年退職記念事業委員会編『子どもたちを信じ桂坂に生きる』2005年, 83-96頁。
 27. (単著)「子どもの安全と人々の共同に支えられた地域づくり」『子どもを守る桂坂学区安全白書2005—京都市「地域の安心安全ネットワーク形成事業 平成17年度」報告書—』, 桂坂学区自治連合会安全推進委員会, 2006年, 5-20頁。
 28. (単著)「ドイツにおける社会国家と余暇・スポーツに関する一考察—ミヒャエル・クリューガー論文に対する一つの応答」『立命館産業社会論集』第46巻第4号, 2011年, 111-132頁。
 29. (単著)「スポーツ政策少考—スポーツの成長産業化と大学スポーツのゆくえ—」『立命館産業社会論集』第53巻, 第3号, 2017年, 1-26頁。
 30. (単著)「若者をとりまく社会文化状況と社会に開かれたケアの視点—本特集の序にかえて—」『立命館高等教育研究』第19号, 2019年, 1-18頁。
 31. (単著)「強制収容所の『スポーツ』—ナチズム・近代・ベルリンオリンピック—」『大原社会問題研究所雑誌』No.742, 2020年, 3-24頁。
 32. (単著) COVID-19, Tokio 2020 und die Krise der Öffentlichkeit in Japan: Aporien der Gesellschaft und des Sports durch den Neoliberalismus, in: *Sport und Gesellschaft*, Volume 18 Issue 1, 2021, S. 65-80.
 33. (単著) Die Probleme der japanischen Regierung in Bezug auf Tokio 2020/21: Prinzipienlosigkeit, Gedankenlosigkeit und Verantwortungslosigkeit, in: *Ritsumeikan Social Scienses Review*, No.2, 2021, S. 83-97.
 34. (単著)「国政選挙とスポーツ政策—日独比較—」『立命館産業社会論集』57巻3号, 2021年, 21-41頁。
 35. (単著)「東京パラリンピックと新自由主義の奇妙なシンクロ—個体的能力観から「能力の共同性」へ

- 一]『立命館産業社会論集』第57巻第3号, 2021年, 1-20頁。
36. (単著)「ウクライナ危機とスポーツに関する省察—『非ナチ化』の教訓—」『立命館産業社会論集』第58巻第1号, 2022年, 49-69頁。
37. (単著)「阿部生雄先生の学問的問いかけ—現代社会と歴史認識の行方—」『阿部生雄先生追悼記念集録』2022年12月, 45-55頁。
38. (単著)「新自由主義による社会とスポーツのアポリア—新型コロナウイルスによる日本の公共圏の危機—」『有賀ゼミ論文集』2023年, 275-291頁。

翻 訳

1. (共訳) アルント・クリューガー／ジェイムズ・リオードン編『論集 国際労働者スポーツ』民衆社, 1988年(第II章: ドイツ民主共和国; 15-44頁, 第VIII章: スウェーデン; 167-183頁, 第XI章: イスラエル; 221-233頁)。
2. (単独訳) ミヒャエル・クリューガー「反動的手段としてのトゥルネン—ヴィルヘルム・アンゲルシュタインとトゥルネンの規律化—」『立命館産業社会論集』第32巻第4号, 1997年, 275-299頁。
3. (共訳) ミヒャエル・クリューガー「スポーツ及びスポーツ科学に対するプロセス=フィギュレーション理論の意義について—ノルベルト・エリアス誕生100年によせて—」『立命館産業社会論集』第34巻第1号, 1998年, 201-214頁。
4. (共訳) オモー・グルーベ／ミヒャエル・クリューガー『スポーツと教育—ドイツ・スポーツ教育学への誘い—』ベースボールマガジン社, 2000年(第2章「スポーツ教育学の生成と展開」)。
5. (共訳) クリステアアーネ・アイゼンベルク「フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーナー—トゥルネンの「考案者」—」『立命館産業社会論集』第37巻第1号, 2001年, 151-167頁。
6. (単独訳) ミヒャエル・クリューガー「ドイツ第二帝政成立期における国民的文化形成とドイツトゥルネン祭」『立命館大学人文科学研究所紀要』第79号, 2002年, 163-190頁。
7. (共訳) オモー・グルーベ『スポーツと人間—文化的・教育的・倫理的側面—』世界思想社, 2004年(第1章「スポーツと文化との関係」)。
8. (単独訳) ミヒャエル・クリューガー「カール・フェルカーと英国におけるドイツトゥルネンの始まり」『立命館産業社会論集』第44巻第4号, 2009年, 159-174頁。
9. (単独訳) クリステアアーネ・アイゼンベルク「英国における「ドイツのトゥルネン」—ある文化伝播の挫折—」『立命館産業社会論集』第45巻第4号, 2010年, 145-163頁。
10. (単独訳) クリステアアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史における社会学, 経済学そして「文化経済学」のアプローチ—新しい方向のための提言—」『立命館産業社会論集』第46巻第1号, 2010年, 197-206頁。
11. (単独訳) ミヒャエル・クリューガー「ドイツスポーツ史の発展に向けた10の命題—クリステアアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史における社会学, 経済学そして「文化経済学」のアプローチ—新しい方向のための提言」に対するコメント—」『立命館産業社会論集』第46巻第1号, 2010年, 215-218頁。
12. (単独訳) クリステアアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史の対象範囲と政治的な目標設定—ミヒャエル・クリューガーの「コメント」に対するコメント—」『立命館産業社会論集』第46巻第1号, 2010

年，207-214頁。

13. (単独訳) ミヒャエル・クリューガー「ドイツスポーツの60年」『立命館産業社会論集』第46巻第4号，2011年，87-107頁。
14. (単独訳) ミヒャエル・クリューガー「ドイツ社会民主党（SPD）150年—社会主義的労働者文化と民衆スポーツ相互間の労働者トゥルネン・スポーツ運動—」『立命館産業社会論集』第49巻第3号，2013年，165-176頁。
15. (共訳) ミヒャエル・クリューガー「ドイツにおけるトゥルネン・スポーツ組織の生成と展開」有賀郁敏編『スポーツの近現代—その診断と批判—』ナカニシヤ出版，2023年，3-19頁。

その他

1. (単著)「スポーツ・表現文化研究の宝庫—F. L. ヤーン・1848/49年革命・身体文化—」『図書館だより』第69号，1995年，2-3頁。
2. (単著) [書評]「中村敏雄編『スポーツ文化論シリーズ① スポーツの伝播・普及』」『運動文化研究』Vol. 13，1995年，126-131頁。
3. (単著)「祝祭空間としてのドイツトゥルネン祭」体育史専門分科会定例大会総括デマ「歴史における身体文化と権力—近代と体育・スポーツをめぐる問題を考える—」日本体育学会体育史専門分科会『特別企画抄録集』1996年，20-23頁。
4. (単著)「体育・スポーツ史研究に『鳥島』は入っているか」学校体育研究同志会京都支部編『体育・スポーツ研究年報』第10号，1997年，16-19頁。
5. (単著)「秋の定例研究会報告：歴史における身体文化と権力—近代と体育・スポーツをめぐる問題を考える—」『体育史研究』第15号，1998年，53-56頁。
6. (単著)「春の定例研究会報告：トニー・メイソン：“1945年以降のスポーツと英国人”」『体育史研究』第15号，1998年，71頁。
7. (単著)「長野冬季五輪少考」『さんしゃ Zapping』Vol. XIV, No.5 (通巻121号)，1998年3月，2-5頁。
8. (単著)「時代は変わったか!?—ドイツ連邦議会選挙'98—」『さんしゃ Zapping』Vol. XV, No. 2，1999年1月，4-9頁。
9. (単著)「Dr. Lothar Wieser, Turnverein in Brasilien—解説—」『体育史研究』第17号，2000年3月，73-74頁。
10. (単著)「スポーツクラブの源流を眺める」(上・下)『たのしい体育・スポーツ』2000年5月，6月号，46-47，44-45頁。
11. (単著)「私と芝田先生」『芝田進午の世界—核・バイオ時代の哲学をもとめて—』桐書房，2002年，180-182頁。
12. (単著)「スポーツクラブの源流」『京都新聞』2004年9月22日付朝刊。
13. (単著)「思考するという資質を絶えず研ぎ澄まして—はしがきにかえて—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ，2005年3月，1-2頁。
14. (単著)「現実そして世界という書物を読むこと—卒業生におくるメッセージ—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ，2006年3月，1-2頁。
15. (単著)「結社研究の最近の動向—ドイツの事例を中心に—」『ひすぼ』，2007年11月，2頁。

16. (単著)「道理と社会正義—社会の担い手としての生き方—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2010年3月, 1-2頁。
17. (単著)「人間の価値とはなにか—一人とのつながりを通じて見えてくる日本社会—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2011年3月, 1-2頁。
18. (単著)「類的存在たる人間の共同性」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2012年3月, 1-2頁。
19. (単著)「人間の価値とはなにか—弱さと強さの弁証法—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2013年3月, 1-2頁。
20. (単著)「状況の複雑さのなかで思想を研ぎ澄ます—国家とトポスの相反関係—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2014年3月, 1-2頁。
21. (単著)「『戦後』70年目の思想と論理」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2015年3月, 1-2頁。
22. (単著)「意味のない勝ちと価値ある負け」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2016年3月, 1-2頁。
23. (単著)「状況と社会科学—われわれの視圏に「鳥島」は入っているか—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2017年3月, 1-2頁。
24. (単著)「『人間がためされる聖域』からの眼差し—「自立」からコミュニカルな関係性へ—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2018年3月, 1-4頁。
25. (単著)「『大衆』は己の中に存在する—オルテガ『大衆の反逆』から考える—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2019年3月, 1-6頁。
26. (単著)「『日々のおしへ』を追想する—丸山眞男から問い直す現代社会—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2020年3月, 1-10頁。
27. (単著)「政策言語に潜む強権性と言葉の力—新自由主義ディストピアからの転換—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2021年3月, 1-12頁。
28. (単著)「東京2020小考—『人類が新型コロナに打ち勝った証』?—」『さんしゃ Zapping』, Vol.35, No.2 (通巻198号), 2021年3月, 11-14頁。
29. (単著)「東京2020をめぐる, 「もう一つ」の視座—五輪ははたしてトポスと調和できるのか—」『さんしゃ Zapping』, Vol.36, No.1 (通巻199号), 2021年7月, 11-17頁。
30. (単著)「『混迷の祭典』とメディア—新聞やテレビは東京オリンピックをどのように扱ったのか—」『さんしゃ Zapping』 Vol.36, No.2 (通巻200号), 2021年12月, 14-20頁 (学校体育研究同志会編『運動文化研究』 Vol. 39, 2022年, 59-62頁に再掲)。
31. (単著)「GNH (国民幸福量・度) からみた日本社会」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2022年3月, 1-10頁。
32. (単著)「ロシア軍のウクライナ侵攻と「平和と民主主義」—プーチン大統領の妄執と謀略を批判する—」『3回生ゼミ論集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2022年3月, 1-8頁。
33. (単著)「北京五輪と「外交ボイコット」」『さんしゃ Zapping』 Vol.36, No.3 (通巻201号), 2022年3月, 14-19頁 (学校体育研究同志会編『運動文化研究』 Vol. 39, 2022年, 63-68頁に再掲)。

34. (单著)「ロシア軍事侵攻と桃太郎」『さんしゃ Zapping』 Vol.37, No. 1 (通巻202号), 2022年7月, 15-20頁。
35. (单著)「政策言語に潜む強権性—新自由主義ディストピアからの転換—」『かもがわ』 No.507, 2022年7月, 3-7頁。
36. (单著)「「新しい戦前」ではなく「希望の空」へ—他者とともに社会の主人公になろう—」『卒業論文集—余暇社会の歴史と現代—』立命館大学産業社会学部有賀郁敏ゼミ, 2023年3月, 1-12頁。
37. (单著)「大学スポーツのこれからを考える」『さんしゃ Zapping』 Vol.37, No.2 (通巻203号), 2023年3月, 20-27頁。
38. (单著)「はしがきにかえて—思考することの大切さ—」有賀郁敏編『スポーツの近現代—その診断と批判—』ナカニシヤ出版, 2023年, i-vi 頁。

IV. 社会における活動

1997年4月～2002年3月	日本体育学会（現日本体育・スポーツ・健康学会）体育史専門分科会世話人・事務局長
2003年4月～2006年3月	京都市立桂坂小学校PTA会長
2006年4月～2008年3月	京都市立桂坂小学校学校評議員
2007年4月～2019年3月	京都バスケットボール協会学生連盟副会長・理事・参与
2013年4月～2015年3月	International Journal of Sport and Health Science（日本体育学会（現日本体育・スポーツ・健康学会）欧文誌）編集委員
2015年4月～2019年3月	日本体育学会（現日本体育・スポーツ・健康学会）誌『体育学研究』編集委員

以上